

典

事

鈴木博之工監撰

築

建

界

A DICTIONARY OF ARCHITECTURE

世

ミラウス・ペウスナー 他 著



鹿島出版会

世界建築事典

昭和59年4月10日 発行©

監訳者 鈴木博之
発行者 河相全次郎

発行所 東京都港区赤坂 鹿島出版会
六丁目5番13号
Tel (582) 2251 振替 東京6-180883

方法の如何を問わず、全部もしくは一部の複写・転載を禁ず。

落丁・乱丁はお取替えいたします。

凸版印刷・富士製本

ISBN4-306-04161-1 C3552

Printed in Japan

典



ニラウスベヴスナー +
ジョン・フレイシグ + ヒュー・オナー 著

事

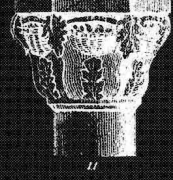
鈴木博之 監訳



築



建



A DICTIONARY
OF
ARCHITECTURE

界



世



A DICTIONARY OF ARCHITECTURE

by

Hugh Honour, John Fleming and Nikolaus Pevsner

Copyright © Hugh Honour, John Fleming and Nikolaus Pevsner

First published in paperback,

The Penguin Dictionary of Architecture,

1966, reprinted 1967, 1970

Second paperback edition 1972, reprinted 1974, 1975

This revised, enlarged and illustrated hardcover edition

first published 1975

Allen Lane,

Penguin Books Ltd.,

17 Grosvenor Gardens, London SW1

All rights reserved including the right of reproduction

in whole or in part in any form.

Published 1984 in Japan by Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

Japanese translation rights arranged

with Penguin Books Ltd., London

through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

訳者まえがき

本書は *A Dictionary of Architecture*, 1975, Penguin Books の全訳である。建築事典にはさまざまな性格のものがあり、大冊としては *Wasmuths Lexikon der Baukunst* (4巻) や *Dizionario Enciclopedico di Architettura e Urbanistica* (6巻)、人名事典として *Macmillan Encyclopedia of Architects* (4巻) などが知られており、一卷本の事典となると人名事典、術語事典、図解事典を含めてさまざまな例があるが、本書はそのすべての要素を満した、簡にして要を得た事典であるといえよう。

本書は建築の様式や部位に関する術語、各国建築史の項目、人名からなっており、読む事典としても十分に使えるものである。しかもその扱う範囲は先史・古代から現代に至り、西欧から東洋・中南米にまで及んでいる。一冊本の建築小百科事典としての性格を十分に果たすのが本書だと思われるのである。

翻訳は1970年代後半に東京大学の建築史学講座に在籍した西洋建築史専攻者を中心として、下記の者がその作業を行なった。作業は1976年に開始され、各人が訳稿を作り、それを監訳者が整理統一を行なうという方式ですすめられた。この最後の作業に予想外の日数を要し、結局8年がかりの作業となってしまったが、その間、ドイツ建築について杉本俊多、オランダ建築について高橋達史、ベルギー建築について辻本敬子、スカンディナヴィア建築とフィンランド建築について伊藤大介、東南アジア建築について佐藤浩司、ブラジル建築について早川祐未の諸氏の助言を得た。しかしながら最終的な訳語の責任が監訳者にあることは言うまでもない。訳稿の整理、読み合わせ等には谷田部恵美子が協力した。遅々たる歩みの全行程中、あらゆる援助を惜しまれなかった鹿島出版会に対して深く謝意を表する。

いわば東大建築史学研究室の総力を結集したこの訳書が、わが国の建築学の発展と建築理解のための一助となれば幸いである。しかしながら訳語の選択、解釈に思わぬ誤りがあるかもしれない。ご叱正をお願い申し上げます。

1984年3月 (鈴木博之)

監訳者 鈴木博之

訳者 小林英之、土居義岳、三浦正幸、原田倫孝、岡田浩、伊藤大介、佐藤浩司、伊藤裕久、渡辺真弓、小川保、日高健一郎、五味俊也、薄田学、渡辺洋子、広田能成、天沼啓子、稲川直樹、村松伸、川向正人、伊藤毅、青木仁、長尾重武

凡例

- 本書の底本は *A Dictionary of Architecture*, 1975, Penguin Books であるが、この事典の原型は Penguin Reference Books の一冊として出版された *The Penguin Dictionary of Architecture*, 1966である。この1966年の出版物は1972年に第二版、1980年に第三版が出版され、それぞれ版を重ねながら現在に至っている。本書が底本とした版はペンギン・ブックスの第二版（1972年版）を基本としてドイツで企画された翻訳版を再度英訳したものである。その際の大きな改訂として、解説末尾に頭文字を付した署名項目をふやしたこと、写真図版を加えたこと、参考文献を加えたこと、の三点がある。ペンギン・ブックス版の事典も改版ごとに増補は行なわれているが、写真図版、参考文献は現行の第三版にも加えられていない。この点が、われわれが底本としてこの版を選定した理由となっている。
- 翻訳進行中にペンギン・ブックス版の第三版改訂作業も進められていたため、その校正刷の送付を受け、一部その校正刷りを参考にしながら訳出を行った。
- 項目は原著のアルファベット順の配列を訳語の五十音順に編成しなおした。これは使用の便を考慮したために他ならないが、原綴による検索のためには巻末に訳語対照リストを加えた。
- 参考文献中、訳書のあるものは可能な限り調査して付記した。
- 原著の誤植、明らかな誤認は改めたが、見解の相違（日本建築の項など）はそのままとし、必要最小限の訳者補遺は〔 〕をもって挿入した。
- 解説中で、項目として立てられている語（原著では大文字で表記）には*印を付した。
- 解説中の術語等でイタリック体表記の用語は、訳文中に原綴を付した。
- ひとつの項目の中に併せて解説されている人名等はゴチック体で表記した。
- 訳語の表記は可能な限り現地での発音を重視したが、慣用の定着したものはその限りではない。

まえがき

本書はさきに1972年に出版された前の版よりもかなり増補されている。多くの項目が新しく採られ、従来の項目も増補されたり改訂・改稿されている。また、ほとんどの項目について参考文献が加えられた。新しい項目のうちには、専門家によってドイツ語版のために書きおろされ、本書のためにアラスター・レイングによって翻訳された東洋関係の主題やその他主として非西欧関係の項目がいくつか含まれている。これらの項目には頭文字による署名が施されており、執筆者氏名は後のページに掲げてある。しかしながら初版同様に、この事典は主として三人の著者の手になるものである。ニコラウス・ペヴスナー卿は中世および19世紀・20世紀の建築家の項目、ヨーロッパおよびアメリカの各国建築の項目、そして様式に関する大半の項目を執筆した。サブリーナ・ロングランドが中世用語の定義に関して、またエニッド・コールデコットが近代技術用語に関して、彼の助手をつとめた。残りの項目はジョン・フレミングとヒュー・オナーの共同執筆によった。これら三人の著者はグスタフ・シュトレゾウ、ヴァルター・ロムシュテック博士をはじめとするプレステル出版社に対して、本書に再録した写真の大半を収集していただいたことを感謝する。そしてまた初版におけると同様、著者たちは多くの友人たちから示唆と教示を受けたことを感謝したいと思うし、また本書の編集に多大の努力を傾注して下さったベティ・エトルス女史にも同じく謝意を表したい。

寄稿者リスト

- AL Alastair Laing, ロンドン
AM Dr Alfred Mallwitz, アテネ
AVR Dr Alexander von Reitzenstein, ミュンヘン
AV Dr Andreas Volwahren, マサチューセッツ州ケンブリッジ
DOE Prof. Dietz Otto Edzard, ミュンヘン
DW Dr Dietrich Wildung, ミュンヘン
HC Heidi Conrad, アルテネルディンク
HS Dr Heinrich Strauss, イエルサレム
KG Klaus Gallas, ミュンヘン
KW Prof. Klaus Wessel, ミュンヘン
MR Dr Marcell Restle, ミュンヘン
NT Nicholas Taylor, ロンドン
OZ Prof. Otto Zerries, ミュンヘン
RG Prof. Roger Goepfer, ケルン
RH Dr Robert Hillenbrand, エディンバラ
WR Dr Walter Romstoeck, ミュンヘン

ア

アアルト, アルヴァ Aalto, Alvar (1898-1976) 近代建築家の巨匠の一人で、母国フィンランドにおける卓越した存在。1923-5年ころに典型的なスカンディナヴィア表現を使った新古典主義でスタートし、そして傑作ヴィープリの図書館(1923-35)、パイミオのサナトリウム (1929-33)、スニラの工場と労働者住宅 (1936-9, 1951-7)に大増築)で*国際近代様式に転じた。彼は材料とその性質に対する強烈な感覚を持っており、フィンランドが森の国であるために、木材を広く使うようになった。また曲げ合板による家具を発明した(1932)。木材は1937年のパリ万国博のフィンランド館とノールマルックのマイレア邸 (1938)において顕著に使用された。アアルトのもっとも独創的な仕事は第二次世界大戦の後にはじまる。第二次大戦までに彼は流行の陳腐な表現をまったく使わずに、うねる壁面と片流れの屋根による力強い表現、レンガと木材のまったく独自の使い方による表現を展開していた。それは、より表情に富んだ全体的印象へ向かう国際的な傾向にまったく一致するものであった。主要な作品は次のとおり。マサチューセッツ州ケンブリッジにあるマサチューセッツ工科大学の宿舎ホール(1947-9):これは正面が曲面で、階段が壁からつき出し斜めに上っていく。セイナヨキの市民ホール (1951)。ヘルシンキの恩給協会(1952-7):これはもっとも簡潔な作品である。イマトラの教会(1952-8):まったく自由なプラン。ヘルシンキの文化ホール (1958)。(図版⇨フィンランド建築)

文献 G. Baird, *Alvar Aalto*, ロンドン, 1971.

アイアーマン, エゴン Eiermann, Egon (1909-70) *ペルツィヒの弟子。工場建築に専念したアイアーマンは、ナチスの年代を通じて、30年代の*国際近代様式をドイツに導入する指導的な役割を果たした。彼が戦後に設計した数多くの工場の中で、もっとも優れたもののひとつが、ブルームベルクの工場 (1951) である。1958年のブリュッセルの博覧会のドイツ館が、彼の国際的名声を不動にした。それは鋭く、明快で、矩形をした、透明なブロック群を完璧に融合させたものであり、それらは景観構成の中に完璧に配列されていた。ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム記念教会の建築群の再建問題を、劇的な新ロマネスク様式による古代の廃墟という形で解決した (1952-62) こ

とは、以前の業績と比較して多くの疑問を残した。その他の新しい建物の中でとくに重要なものとして挙げられるのは、エッセンのエッセン炭鉱の事務所 (1958-60)、フランクフルトのメセルス・ネッカーマンの卸売倉庫等 (1958-61)、およびワシントンのドイツ大使館 (1961-3) である。1967年には、ミュンヘン・オリンピックのために提出された設計を審査する審査委員長に選ばれた。1968年には、倒立したチャリス〔キリスト教のミサに用いる杯〕のような形をした塔を持つ、イタリアの会社のための事務所群をフランクフルトに設計している。

文献 G. K. Koenig, *Architettura tedesca del secondo dopoguerra*, ボローニャ, 1965.

アイオリス柱頭 Aeolic capital ⇨ オーダー

アイ・キャッチャー Eye-catcher 装飾的な建物。一般に公園の中の小高い所に、視線を止めるためか、さもなくば配置に句読点を打つ目的で建てられる。時として大規模なものもあり、その例としてはシェーンブルン宮にあるグロリエッテが挙げられる。これはオーストリアおよびドイツにおいては、この種の建物の代名詞とされている。英国の18世紀の風景庭園においては、これはしばしば廃墟を模造した形をとる。⇨点景建築



アイ・キャッチャー: シェーンブルン宮庭園の中のグロリエッテ, 1775

アイケル, ジョヴァンニ・サンティニ

Aichel, Giovanni Santini (1667-1723) イタリア系のボヘミア人建築家で、プラハに生まれたがイタリアで教育を受けた。英国とオランダを訪ねてもいる。(ポロミーニと*グアリーニの系統の) バロック様式によったり、ネオ・ゴシック様式によったりして仕事をした。彼は後者を得意とし、それはカーペンターズ・ゴシックに属するもので快活・素朴、大変個性的である。高雅で軽やかなヴォールト架構において(ポロミーニの系統の)星形を偏愛していた。クラートラのマリーエンキルヒェ (1712-26)、ゼーラウにおける諸教会堂 (1712年着工)、ザールに近いツェレナ・ホラ上のザンクト・ヨハン・ネポムーク教会(1719-22)がその例である。だが彼は風変わりて、影

響も及ぼさず後継者もまったくなかった。(図版
 ⇨チェコスロヴァキア建築)

文献 H. G. Franz, *Bauten und Baumeister der Barockzeit in Böhmen*, ライプツィヒ, 1962; E. Hempel, *Baroque Art and Architecture in Central Europe*, Pelican History of Art, Harmondsworth, 1965.

アイトヴェズ, ニルス Eigtved, Nils (1701-54) デンマークのロココ時代の建築家。コペンハーゲンのアマリエンボルク宮で有名。これは18世紀における、フランス以外の国でもっとも優れた都市的建造物群である。カール・フリードリッヒ・*ベッペルマンに就いて(1725-33)ドレスデンおよびワルシャワで修業し、パリおよびローマを訪れたのち1735年にコペンハーゲンに定住した。宮廷建築家として彼は新市街全体をレイアウトした。八角形のアマリエンボルク宮(1750-4)と、対角線状に配された四つの宮殿が、その中心を成している。彼はそれらと軸線を共有するフレゼリク教会を計画したが、実施段階では大幅に変更された。クリスチアンスボルクの王宮の、彼によるロココ風の内部(1734以降)は、1794年に取り壊された。

文献 K. Voss, *Arkitekten Nicolai Eigtved (1701-54)*, コペンハーゲン, 1971.

あいば
合端 Skewback *迫台で、アーチを受ける部分。

アイルランド建築 Irish architecture もっとも注目すべき初期の独創的な段階は、ノルマン様式以前の修道院コミュニティの段階で、そのコミュ



セント・ガララスの隠者の庵, ディングル, 7世紀

ニティでは、徐々に前方に持送りながら水平に石を積んだ疑似ヴォールトによって石のヴォールトをかけられた円形や正方形の小屋に修道僧たちが住んでいた。このようなコミュニティには、先細りの円塔とみごとな高い十字架「ハイ・クロス」が



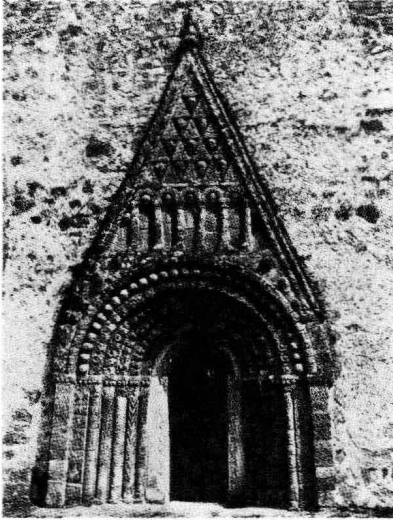
(左) 円塔, アルドモア
 (右) ムーンのハイ・クロス, キルデール, 9世紀

いくつか付設された。もっとも有名な遺跡は、スケリッグ・マイケル、ネンドラム、グレンダロー、クロンマクノイズ、モナスターボイスなどである。これらは、ほとんど10世紀から11世紀にかけてのものである。

アイルランド・ロマネスク様式は、キャッシュルのコルマック礼拝堂にもっとも劇的なモニュメントが見出されるのであり、それはトンネル・ヴォールトの身廊とリブ・ヴォールトの内陣を持つ。



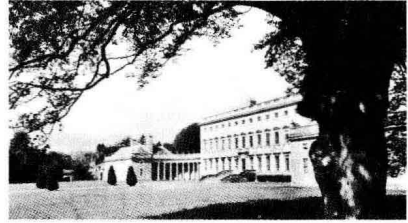
セント・ケヴィン教会, グレンダロー, 7世紀



クロンフェルト大聖堂の西正面入口、ゴルウェイ、12世紀

アイルランド特有の特徴をほんのわずかしき示さないノルマン様式には多くのモニュメントがある。*シトー派修士たちは1140年代にやって来たのであり、ダブリンのクライスト・チャーチ大聖堂の東端部は彼らの影響を示している。すべてが初期英国式でできた完全なゴシック様式は、クライスト・チャーチの身廊（ウェールズとセント・デイヴィッドに近い様式）と、大部分再建された、やはりダブリンに建つセント・パトリック大聖堂とに表われている。ゴシック建築へのもっとも顕著なアイルランドの貢献は、たいていは地方に位置する修道院であり、それらは身廊と内陣の間に塔を持つもので、この形式は英国の修道院においてもやはり典型的である。

中世建築は17世紀まで続いた。英国人たちは、1628-33年建設のゴシック大聖堂と1630年代のカリエック・オン・スールやストラトフォードのジギンスタウンのような住宅を持ったロンドンデーのごとき新しい町を發展させた。ゴシックは徐々に寄棟屋根とパラペットに代えられ、ボールーやキルメインハム病院のような建物は様式的にはまったく英国のものである。*パラーディオ主義はアイルランドに十分な取獲をもたらした。主な建築家は、サー・エドワード・ロヴェット・*ピアス、リチャード・*キャッスル、ジェームズ・*ガンドン、フランシス・ジョンソンといった人々である。例としては、キャッスルトウンやピアスの設計によってダブリンに建つ国会議事堂、キャッ



キャッスルトウン・ハウス、セルブリッジ、1722、キャッスル設計

スル作のパワースコート、ガンドンがダブリンに設計した税関とフォー・コート「裁判所」、ダブリンのトリニティ・カレッジの学寮長の住宅、*ナッシュ作のカレドンそしてタウンリーホールその他多数がある。アイルランドには実際、ジョージ朝様式の住宅が豊富である。もっともそれらは、機能的でないためすぐさま減少したのであるが、それでもダブリンでは多くがなお保たれていて、英国諸島の中でもっともすぐれた主要なジョージ朝様式の都市であると主張するのもっともなことである。もし、いくつかヴィクトリア朝の建物を選ぶとすれば、それはまた本質的に英国的なものとなるだろう。*パーゼスの設計にかかるコーク大聖堂、ランオン設計のベルファストのクイーンズ大学、ディーン・アンド・ウッドワードの設計したトリニティカレッジ博物館などがそれぞれであり、いずれも様式的にはゴシックである。今日の最高の建築家はマイケル・スコットで、今日までの最高の建物はアーレンズ・バートン・アンド・コラレックによって1963-7年に建てられたトリニティカレッジの新図書館である。

文献 H. G. Leask, *Irish Castles*, ダンダーク、1941; H. G. Leask, *Irish Churches and Monastic Buildings*, ダンダーク、1955-60.

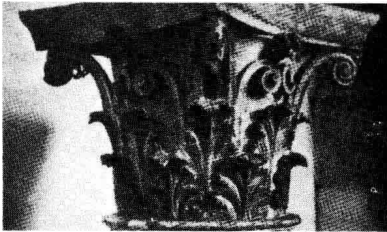
アヴェルリーノ、アントニオ Averlino, Antonio ⇨フィラレーテ

アウト、ヤコブス・ヨハネス・ピーター Oud, Jacobus Johannes Pieter (1890-1963) 1911年にドイツでテオドール・フィッシャーの下で短期間働く。1915年にセオ・ファン・ドゥースブルクに出会い、彼と*リートフェルトとともにデ・スティルの中心人物となった。建築では、この団体は、表現主義者の集まり（デ・クラーク、ピエト・クラマー）だった空想的な傾向を持つアムステルダム派に対抗して、抽象的な立体派を標榜していた。アウトは1917年から19年にかけての早い時期にすでに厳格な立体派の手法による意匠を残している。

1918年にはロッテルダム市住宅局の顧問建築家になり、1927年までその地位にとどまった。そのもっとも重要な作品は、フークの労働者住宅(1924-7)とキーフホークの住宅団地(1925-7)である。のちにアウトはそのデザイン上の厳格さを捨て、軟化し、当地では俗にバトン・ロココとよばれている奇妙に装飾的で、いささか遊戯的なオランダ様式の創造に手を貸した。その代表的な例としては、ハーグのシェル・ビルディング(1938-42)が挙げられる。

文献 G. Veronesi, *J. J. P. Oud*, ミラノ, 1953; H. L. C. Jaffe, *De Stijl 1917-1931*, ロンドン, 1956; K. Wiekart, *J. J. P. Oud*, アムステルダム, 1965.

アカンサス *Acanthus* 密集した肉の厚い扇状の葉をした植物でコリント式もしくはコンポジット式の*柱頭や他の線形の彫刻的装飾のモチーフに用いられる。

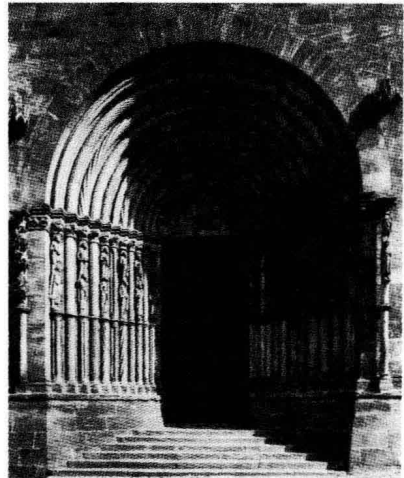


アカンサス：コリント式柱頭，エピダウロス，BC5世紀中葉

アーキヴォルト *Archivolt* アーチの表面にその外郭にそってつけられた連続的なアーキトレーフの線形；また，*内弧面，すなわちアーチの下側をもいう。(図版次段)

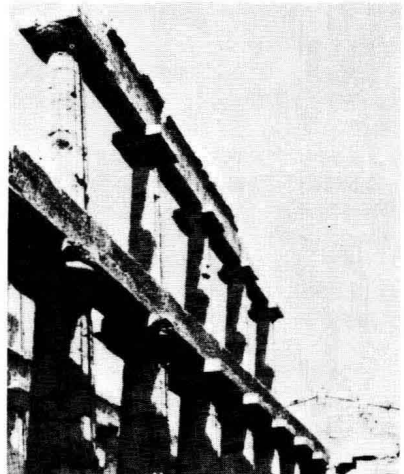
アーキテツ・コパートナーシップ *Architects Co-Partnership* 1915年から1917年頃に生まれた英国建築家のグループ。彼らの主要作品にはつぎのようなものがある。ウェールズのプリン・モワーの工場(1949)。オックスフォードのセント・ジョンズ・カレッジの学生施設(1956-9)。ケンブリッジのキングズ・カレッジの施設(1960-2)。またダービーシャーのリプレイの学校(1958-60)をはじめとする学校建築。ラゴスのイコイの集合住宅(1957-9)。ロンドンのインペリアル・カレッジの生化学棟(1961-4)。

文献 M. Webb, *Architecture in Britain Today*, ロンドン, 1969; R. Maxwell, *New British Architecture*, ロンドン, 1972.

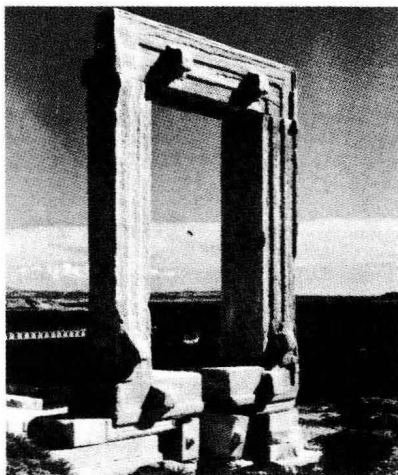


アーキヴォルト：バンベルク大聖堂の主入口，13世紀初頭

アーキトレーフ *Architrave* *エンタブレチュアを構成する主要な三部分のうちの下位の位置。また，より広義にはドアや窓の周囲にある線形のついた枠(もしこの枠が一番上で直角に曲がる場合には，垂直に立ち上がり，水平に折れる。隅部に水平の突出を形成する場合は肩付きアーキトレーフ(shouldered architrave)と呼ばれる)。(図版，他に◇扉，エンタブレチュア，オーダー)



アーキトレーフ：ポセイドン神殿，バエストゥム，BC500



アーキトレヴ：アルカイック期神殿，ナクソス

アーキトレヴ-コーニス Architrave-cornice
*小壁の省略された*エンタブレチュア。

アーク Ark ⇨エカル

アクロテリア Acroteria *ペディメントの頂部や端部に置かれた、彫像や装飾のための台座、より広義にはその台座と彫像等を含めていうこともある。



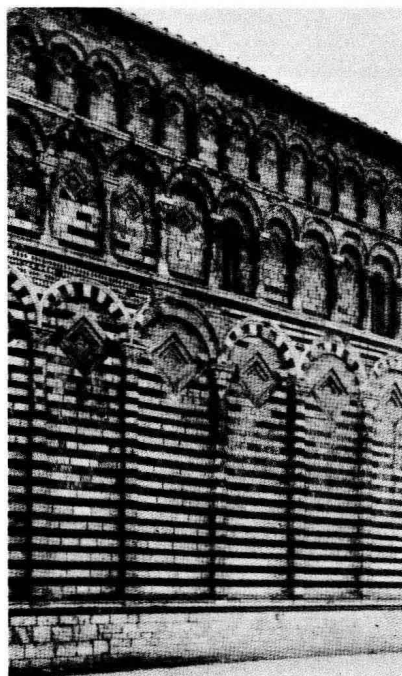
アクロテリア：BC500頃

アクロポリス Acropolis ギリシア都市の城砦で、都市のもっとも高い場所に建てられ、アテネに見られるように中心となる神殿や公共の建物を内部に擁する。

アーケード Arcade アーチの連なりをいう。アーチは*ピア（支柱）もしくは円柱に支持され、あるいは独立して立ち、また、壁に取り付けられたような盲アーチの場合がある。覆いのある商店



アーケードの巡らされた中庭：カサ・デ・ピラト，セビリヤ，15-16世紀



盲アーケード：サン・ジョヴァンニ・フルチヴィタス教会，ピストイア，12世紀末

街をもいう。例えばピカデリーのパーリントン・アーケード。大変大きいショッピング・アーケードのいくつかは19世紀のイタリアで、とくに*メングーニによって作られた。それらをイタリア語でガレリア (*Gallerie*)、ドイツ語ではパッサーゲン (*Passagen*) と呼ぶ。

文献 J. F. Geist, *Passagen: ein Bautyp des 19 Jhs*, ミュンヘン, 1969.

アケメネス朝建築 Achaemenid architecture ⇨
イラン建築

アゴ스티ノ・ディ・ドゥッチオ Agostino di Duccio (1418-81) 本来、彫刻家であったが、リミニのテンピオ・マラテスティアーノで*アルベルティと協働した。そこには、きわめて個性的で優雅に洗練された浮彫り彫刻が、いかんなく見られる。同様に彫刻的で巧みなものは、ペルーシアに建つサン・ベルナルディーノの小さな教会堂のために彼がデザインしたファサード(1457-61)である。大変印象の異なるものに、彼の記念的な作品、ペルーシアのポルタ・サン・ピエトロ(1473年着工)がある。

文献 L. H. Heydenreich and W. Lotz, *Architecture in Italy: 1400-1600*, Pelican History of Art, Harmondsworth, 1974.

アゴラ Agora ギリシアあるいはローマの都市における広場。市場や一般の集いの場に使われた。普通*フォルムのなかのように柱廊で囲まれている。

アザム、コスマス・ダミアン および **エーギット・クヴィリン** Asam, Cosmas Damian (1686-1739) and Egid Quirin (1692-1750) 建築家として行動をともにした兄弟。装飾家としては、ときに、別行動をとることもあった(コスマス・ダミアンはフレスコ画家として、エーギット・クヴィリンは彫刻家として仕事をした)。バイエルン地方の石工の息子であった彼らは、ローマに出てカルロ・*フォンターナの下で学ぶ(1712-4)までは、無名の田舎職人の域を出なかった。ローマでの修業の結果、ロココよりもむしろ本質的にはバロックの建築家として、その地位を確立する。彼らは、優雅であるが表層的な同時代人の作風よりも17世紀イタリアの含蓄ある作風を好んでいたようである。彼らの装飾の仕事は、多くの重要な教会にみられるが(例えば、ヴァインガルテン、アインゼーデルン、インスブルックのザンクト・ヤコブ教会、フィルステンフェルトブルック、オスターホーフェン、フライジングの大聖堂、インゴルシュタットのザンクト・マリア・ヴィクトリア教会、アルダースバッハ)、彼らの設計により建設された教会は四つである。これらの教会では、間接採光によるメロドラマ的な効果、幻覚を誘う空間の処理など、彼らがローマから持ち帰った工夫が大胆に用いられている。彼らの情感の演出が激しく表現されているのはロール(1717-25)とヴェルテンブルク(1717-21)の祭壇画に用いられ

た幻想的な騙絵(*tableau vivant*)である。彼らが、ミュンヘンの自邸の隣りに自費で建てたザンクト・ヨハン・ネポムーク教会では、表現上にさらに発展がみられる。この教会は、小さいながらも、見る者に抑え難い興奮を与え、建築と装飾の結合、そして立ち上る宗教的熱情の巧みな表現をもつ点で、ドイツ・バロックの傑作である。彼らの最後の作品であるシュトラウペンクのウルスリエンキルヒェも、それに優るとも劣らぬ傑作である。(図版⇨スイス建築)

文献 A. Feulner, *Die Asam-Kirche in München*, ミュンヘン, 1932; H.-R. Hitchcock, *Rococo Architecture in Southern Germany*, ロンドン, 1968.

アシュビー、チャールズ・ロバート Ashbee, Charles Robert(1863-1942) 建築家である以上に社会改革家であった。彼の規範は*モリスであった。1888年に彼はロンドンのイースト・エンドに自己の手工芸ギルドおよび学校を設立した。このギルドは1902年に地方、すなわちチップینگ・カムデンに移った。第一次世界大戦によってこのギルドは終息した。彼の最良の建築デザインはロンドンのチェイン・ウォークに建つ2戸の住宅(1899)である。

アステカ建築 Aztec architecture ⇨中央アメリカ建築

アストラガル Astragal 断面が円形の小さな線形。しばしば、連珠紋をあしらった装飾を伴う。(図版、他に⇨エンタブレチュア)



アストラガル

アスプルッチ、アントニオ Asprucci, Antonio (1723-1808) ローマの著名な初期新古典主義の建築家。彼の傑作はローマにあるヴィラ・ボルゲーゼ(1777-84)内部、いくつかの優雅な神殿、にせの廃墟など、同庭園内の点景建築である。

文献 C. L. V. Meeks, *Italian Architecture 1750-1914*, ニュー・ヘヴン, 1966.

アスプルンド、グンナール Asplund, Gunnar (1885-1940) 20世紀でもっとも重要なスウェーデンの建築家。ダネスの手によって初めて発展したスカンディナヴィアの古典主義の中で仕事を始めた。このスタイルにおける彼の主要な作品は、ストックホルム市立図書館(1920-8)であ

り、そこにおいては、背の高い円形の閲覧室が、残りの全体の上に円筒形にそびえている。1930年のストックホルム博覧会のための作品において、彼はヨーロッパ主流の近代スタイルに転向したが、そこで彼は当時一般的だったかなり量感のある扱いをせずに、細い金属の部材、大量のガラス、そして自由な形の屋根などを用いて軽快に仕上げた。それによって彼はそのスタイルに気品と透明さを与え、大きな国際的衝撃をもたらした。しかし、アスプルンドの作品は決してはったりでもこげおどしでもなかった。彼の建物はつねに高貴な抑制を守っている。そのなかで最高のものは、美しく透き通った中庭を持つイエーテボリのタウンホールの増築（1934-7）、および、現存する純粋な20世紀のモニュメンタリティーと宗教建築のもっとも完全な例といってもよいストックホルムの火葬場（1935-40）である。（図版⇒スカンディナヴィア建築）

文献 G. Holmdahl, S. I. Lund & K. Odeen, *Asplund Arkitekt, 1885-1940*, ストックホルム, 1943; B. Zevi, *E. Gunnar Asplund*, ミラノ, 1948.

アズレホ Azulejos 釉薬を施された陶製のタイル。通常、明るい色彩で花柄等の模様が描かれている。多くはスペイン、ポルトガル、中央アメリカ、南アメリカの建物の内装、外装に用いられる。

アタッチド・コラム Attached column ⇨ エンゲージド・コラム

アダム、ウィリアム Adam, William ⇨ アダム、ロバート

アダム、ジェームズ Adam, James ⇨ アダム、ロバート

アダム、ジョン Adam, John ⇨ アダム、ロバート

アダム、ロバート Adam, Robert (1728-92) 18世紀後半の英国最大の建築家であり、装飾家、家具デザイナーとしても同じ位すぐれており、そのために彼の名は現在でも家庭用語となっている。彼はその簡潔さと両性具有的ともいうべき優雅さにおいて同時代のフランス人*スフロと比較されるが、彼にはスフロの冷たい莊重さはない。彼は抜け目なさや非情なまでの野心をもっていたが、彼の性格には優しいロマンチックな側面もあ

り、その両面において典型的な根っからのスコットランド人であった。この両面は、新古典主義のピクチュアレスク化と、ネオ・ゴシックの古典主義化との間に揺れ動く彼の作品に反映している。彼の作品は格式ばらない品の良さ、術学的でない博識、尊大ではない富裕さを備えており、それは彼のパトロンたちの文明化された社会を完璧に反映している。確立された伝統に対して激しい断絶をきたすことは品の悪い良くないことだと認めて、彼は彼以前のパッラーディオ主義者たちよりも、また彼以後のギリシア復興主義者たちよりも軽快でいっそう華やかな新古典主義様式を案出した。彼は古典主義建築にギリシア・ドリス式を用いたり、ゴシック建築にピクチュアレスク風な非対称性を持ち込んだりするような、ことさらな新機軸は避けた。当時盛んであった古典主義に対する新しい要求に、彼は装飾モチーフの範囲を拡大することによって、また主として帝政期のローマの浴場に基づいた室内プランのいっそう想像力に富んだ対比的な室内方寸によって、答えた。部屋形の巧妙な変化と、空間に神秘性を与える柱を立てたスクリーンやアプスに対する好みとによって、彼は彼のネオ・ゴシックの城館——これは外観はあくまでも量感に満ちたロマン的なものであり、内部はあくまでも快適に古典主義的であった——に劣らず、ピクチュアレスクに対する趣味に答えた。こうして彼は、ちょうど*バーリントンが英国のアウグストゥス期ともいうべき時代の建築家であったように、感受性の時代の第一の建築家となった。彼の影響は急速に英国全土に拡がり、さらにロシア、アメリカにも及んだ。彼の創作力は絶大で、不幸にもアデルフィでの投機に失敗したが、さもなれば財をなしたに違いない。

彼の父**ウィリアム** (1689-1748) は彼の時代のスコットランド第一の建築家であり、*ヴァンプラ、*ギップズおよび英国パッラーディオ主義者たちに基づいた力強い個人様式を発展させた。たとえばエディンバラ近郊のホートウン・ハウス (1721他) およびパンフのダフ・ハウス (1730-39) などがある。彼の兄弟の**ジョン** (1721-92) および**ジェームズ** (1732-94) も建築家であり、三人はともにエディンバラの父の事務所でも修業した。ロバートとジェームズはエディンバラ大学でも学んでいる。ロバート・アダムの初期の作品は優れたものではない。たとえばダンフリーズ・ハウス (1750-4設計) など。彼の才能が現われるのはようやく大陸遊学 (1754-8) 以後であり、この旅行の大半はローマで*クレリッソーの下でローマ帝政期の建築を研究することに費された。彼とはダルマティアのスパラトにあるディオクレティアヌ

スの宮殿の調査も行なった(後に彼によって『スパラトの廃墟 *Ruins of Sparato*』(1764)として出版された)。

1758年に彼はロンドンに居を構え、クレリッソールとともに同様の大陸遊学(1760-3)を終えた弟のジェームズもそこに加わった。柱を巡らしたロンドンのアドミラルティ・スクリーン(1759-60)はただちに彼の能力と独創性を証拠だてたが、その他の彼の仕事はすべて古い建物の内部改造か、あるいはすでに他の建築家によって開始されていた住宅を完成させるものであった。それにもかかわらず彼の様式は急速に成熟し、ヘアウッド・ハウス(1758-71)、ケドルストン・ホール(1759他)、サイオン・ハウス(1760-9)、オステリー・パーク(1761-80)、ルートン・ホール(1766-70)、ニュービィ・ホール(1767-85)、ケンウッド(1767-9)などの室内は、おそらく彼のインテリア・デザインの傑作である。細部に対する彼の厳しい注意は、各室の絨緞から鍵穴にいたるまでのあらゆる部分に彼が注いだ注意と同じく、塗装された装飾の宝石のような仕上げやきわめて薄いスタッコの浮彫り仕事にも現われている。これほど総合的な室内装飾計画を試みた建築家は彼以前にはいなかった。個々の装飾モチーフは小さなものであることが多いにもかかわらず、それらは全体の効果が希有な巧緻さを示すような技倆をもって織り上げられており、また各室には同一の芸術的個性が明らかであるにもかかわらず、全体のつながりはいささかも単調ではない。彼とジェームズは彼らの『建築作品集 *Works in Architecture*』(1773, 2nd vol. 1779, 3rd vol. 1822)の序文において表明した彼らの賛美する特質、すなわち動きあるいは「上昇と下降、突出と湾曲その他の形態的多様性」および「多様な浅い線形」などをそれらに完璧に表わしている。彼の新古典主義は、さまざまな幾何形態をもったサイオン・ハウスにおける平面計画(パシリカ型ホール、ロトング、突出した中央のパンテオンなど)、およびローマの凱旋門をモデルにしたケドルストン・ホールの南正面にも、もっとも顕著である。

平面計画における彼の独創性と巧みさは、1770年代のロンドンの住宅——たとえばセント・ジェームズ・スクエア20番地、ポートマン・スクエア20番地など——においてその極致に達したが、そこでは装飾はますます浅く直線的になり、彼が晩年に批判された軽薄な安っぽさへの傾斜を示している。

1768年から1772年までの間、彼とジェームズは彼らのもっとも野心的な企画、テムズ河岸に建つ巨大な宮殿風住宅群であるアデルフィに関係し

た(現存せず)。不幸にもこの投機は失敗に帰し、臨機の処置とエディンバラにいた兄のジョンの融資とによって辛くも破産だけは免れた。

おそらく一部はアデルフィの失敗のために、ロバート・アダムの作品の質は1775年以後急激に衰えた。しかしそれは彼の晩年の10年程の間、エディンバラにおける大きな仕事の刺激によって、驚異的な回復を見せた——登記記録所(1774年開始され、彼の死後、変更を伴って完成)、大学(1789年開始、W. H. プレイフェアによる変更案により完成、1887年ロウアンド・アンダーソンによってドーム付加)およびシャーロット・スクエア(1791年設計)がそうである。大学の正面入口は彼のもっとも記念的な建物であり、おそらく建築家としての彼の傑作であった。彼が最も得意の城の多くもこの時期に属している。たとえばカルジーン城(1777-90)およびセトン城(1789-91)であり、これらはこの時代にしては大変進んでいた。彼の初期のネオ・ゴシック様式、たとえばアランウィック城(1770頃、現存せず)の内部などは、洗練された優雅さをもつ彼の新古典主義様式に似かよったものであった。しかし今や彼はもっと大胆な手法を發展させた。カルジーン城においては、アイアーシャーの海岸の劇的な敷地の有利さを最大限に活かし、女性的な繊細さをもった部屋を包んでいる円塔や城壁を好戦的に示した。この城の魅力はこの対照にあり、それはまったく安全な文明化された室内から海の嵐の冷たい恐怖をここで楽しめたであろう18世紀の感受性豊かな人々によって、大いに好まれたにちがいない。(図版▽英国建築)

文献 A. T. Bolton, *The Architecture of Robert Adam and James Adam*, ロンドン, 1922; J. Lees-Milne, *The Age of Adam*, ロンドン, 1947; J. Fleming, *Robert Adam and his Circle*, ロンドン, 1962; D. Stillman, *The Decorative Work of Robert Adam*, ロンドン, 1966.

アーチ Arch

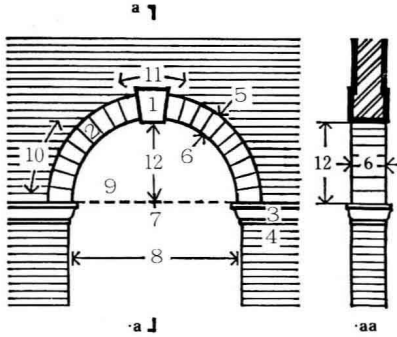
アンズ・ド・パニエ・アーチ (*Anse de panier*)

フランス語で、曲線が籠の柄のカーヴに似たアーチをいう。左右に弓形をたどると、曲率の小さい二つの弧に終わる。バスケット・アーチともいう。

バスケット・アーチ、三心アーチ (*Basket arch* or *three-centred arch*) ⇨アンズ・ド・パニエ・アーチ

力分散アーチ (*Discharging arch*) ⇨隠しアーチ

ドロップ・アーチ (*Drop arch*) 弧の半径よりスパンの大きい尖頭アーチ。



アーチ：各部の名称

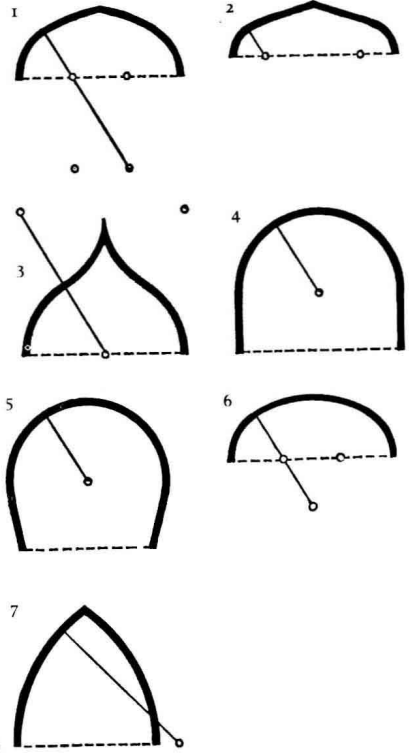
- | | |
|----------------------------------|------------------------------|
| 1. かなめ石 <i>Keystone</i> | 7. 中心 <i>Centre</i> |
| 2. 迫石 <i>Voussoirs</i> | 8. スパン <i>Span</i> |
| 3. 迫元 <i>Impost</i> | 9. 迫元線 <i>Springing line</i> |
| 4. 迫台 <i>Abutment</i> | 10. ハンチ <i>Haunch</i> |
| 5. 外弧面 <i>Extrados</i> | 11. 頂部 <i>Crown</i> |
| 6. 内弧面 <i>Intrados or soffit</i> | 12. ライズ <i>Rise</i> |



馬蹄形アーチ：コルドバのモスク、786-990

楕円アーチ (*Elliptical arch*) *迫元線上の一点に中心をおいた半楕円形のアーチ。

等辺アーチ (*Equilateral arch*) ⇨ 尖頭アーチ
持送りアーチ (*False arch*) 少しずつ片持ち梁を張出してゆくか、あるいは水平面上の二点から持出し構造にして組み立てるアーチ。



アーチの弧とその中心位置

1. 四心アーチ *Four-centred*
2. チューダー様式アーチ *Tudor*
3. オジー・アーチ *Ogee*
4. 上心アーチ *Stilted*
5. 馬蹄形アーチ *Horseshoe*
6. アンス・ド・パニエアーチ *Anse de panier*
7. ランセット・アーチ *Lancet*

四点アーチ、偏平アーチ (*Four-centred or depressed arch*) 中世末期の一形態。四つの弧からなる尖頭アーチの一種で、低い外側の二つの弧は*迫元線上の二点に中心をおいて立ち上がり、高い内側の二つの弧は迫元線の下方に中心がある。

馬蹄形アーチ (*Horseshoe arch*) イスラム建築にしばしば見られる。先がとがったものと先の丸い馬蹄形の二種がある。

ランセット・アーチ (*Lancet arch*) スパンより大きい半径の弧をもつ、とがったアーチ。

オジー・アーチ (*Ogee arch*) ふつう四つの弧からなる、とがったアーチ。二つの弧の中心はアーチ内にあり、他の二つの弧の中心はアーチ外にある。すなわち二つの曲線の複合で、一方はふく